

6年生
脚本

「小粒の猫」



♪雨の音

イラストと共に、朗読が始まる

朗読「小粒の雨が降る公園の中、1匹の子猫と、一人の少女の静かな出会いがありました。

少女は子猫に『グンタ』と名づけ、子猫は少女が『ミキ』という名前だと知りました。

ご飯の時も、勉強をする時も、本を読む時も、寝る時も、いつも優しい顔でみてる

そんなミキがグンタは大好きでした。

一年、二年、三年・・・二人は幸せな時を刻んでいきました。

ある日から、ミキは悲しそうな顔をしてグンタを見るようになりました。

大学へ行くことになり、遠くのアパートに引っ越すことになったのです。

グンタはよくわからないまま、ミキの元気のない顔をいつも心配そうに見上げていました。

ある日、大粒の涙を流しながら、ミキはグンタをだきしめ

「じゅめえね。」

と小さな声で言うと、車に乗りました。

車にはミキの荷物が山ほど積んでいます。

グンタは嫌な予感がしました。

車のエンジンがかかり、家の人みなさびしい笑顔でミキに手を振っています。

さらに嫌な予感がしました。

車は動き出し、朝日の方向へと走りだしました。

(ミキにもう会えない)

そんな気がして、グンタは空いている玄関の隙間から外へ飛び出しました。
車が見えなくなっても、グンタは走り続けました。

息が切れても、走り続けました

大好きなミキに会うために

幕は閉じたまま、幕前で

照明オフ…グンタにスポットのみ

♪…夜の音

グンタ、上手からへ口へ口になって走って登場 探しながら走り続け

舞台下で

グンタ「はあはあ…全然、おいつけないや。ミキミキどこいったんだよ」

あたりを見回す。座り込みながら

グンタ「ここは…どこ? くらい…さむい…お腹もすいてきた。」

♪…カラスの音がどんどん大きくなってきて

カラス三人組、グンタを取り囲みながらぐるぐる回る

カラス1「カーカー! お前だれだ!」

カラス2「カーカー! お前だれだ!」

カラス3「カーカーお前だれだ!」

カラス123「誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ」

ピタッと止まってシーンとまつ。

グンタ「ねこの、グンタです。」

カラス1「ねこだ」

カラス2 「ねこだ」

カラス3 「ねこだ」

カラス123 「ねこだねこだねこだねこだねこだねこだねこだねこだ」

ピタッと止まってじっとみる

グンタ 「ねこ・・・です。」

カラス1 「ここ、俺たちの縄張り」

カラス2 「縄張り」

カラス3 「縄張り」

カラス123 「縄張り縄張り縄張り縄張り縄張り縄張り縄張り縄張り」

ピタッととまってにらむ

グンタ 「すみ・・・ません？」

カラス1 「出てけ」

カラス2 「出てけ」

カラス3 「出てけ」

カラス 「出てけ出てけ出てけ出てけ出てけ出てけ出てけ出てけ」

突きながら追い出し、満足して帰っていく

グンタ 「はあはあ、もう、歩けないや、体がいたい、誰か・・・たすけて」

ボタンと倒れ、しばらくすると下手から団長登場

団長 「くんくんくんくん・・・人間臭い、人間臭いぞ。」

団長 「くんくんくん・・・うわーびっくりした！なんだ、ボロ雑巾かと思ったらねーじゃないか。

小僧、名前は。」

グンタは寝ながら

グンタ「ぼくは、グンタ。あなたは？」

団長「私か私はない猫さ。お前は どうしてそこに倒れている？」

グンタ「ご主人をおいかけたら、(体をおこし) いてて、道に迷っちゃって。」

団長「なんだ、捨て猫か。どうりで人間臭い。しっしっ、あっちへおいき。」

グンタ「捨て猫？」

団長「はあ？捨て猫も知らないってか。めでたいやつだ。あっちへおいき。」

グンタ「ぼく、ミキって人に会いたいです。緑色の車に乗って、朝日の方へ走っていった車、み

ませんでしたか？」

団長「おいおい。待て待て待て待て、お前、何言っているかわかっているのか？」

お前はね、捨てられたの。」

グンタ「ぼくが、捨てられた？まさか。」

団長「いたたたたー。いるんだよねー。そういう痛い猫。」

お前、ご主人との出会いは？」

グンタ「雨の日に公園で、拾ってもらいました。」

ここから、情緒不安定な団長の演技が始まる、喜怒哀楽を全て出す。

グンタをつついたり、いかったりしながらめちやくちやな演技をする。

団長「はいビンゴ。痛い猫決定！気付こうよ。だんな。もういい歳なんだから。」

いいか、お前は公園で拾われた。そして、ちよっとの間それはそれは大切にされた。

ああー幸せ幸せ。

毎日美味しいご飯、毎日なでなで。散々偽りの愛情を注ぎこまれある日、

飼えなくなつて、ぼーいだ!

人間はな、忘れるんだよ。都合よくな。

お前のご主人はもう、お前のことなんか忘れている

今頃、明るくて、あたたかい部屋の中でな!

それに比べお前はどうか、くらーくて、さむーい道を散々走り、散々探し、この様だ

はあ、悲しい。人間は忘れ、お前は気づかない。そう、

お前は人間に忘れられたこともわすれたあわれな猫なんだよ!

おっと、いかんいかんいかん、言いすぎた。もう、つかれただろう?今日はお休み。

私の仲間の所へ案内しよう。そこで、何もかも、忘れよう。」

グンタ「ぼくは・・・」気を失う

団長「ほう、疲れすぎて、気を失ったか。こいつは芯が強そうだ。よもすれば立派な反乱分子に育つやも知れぬ・・・ふふふ。連れて帰るか。」

開幕

♪…酒場

幕が開くとレジスタンスで宴の真っ只中の演技を行う(三十秒くらい)

団長「諸君、諸君、明るいニュースの時間だ!」(会場、静まり返ったあと、盛り上がる)

団長「我らが同胞が今宵また一人増えた。名前がグンタ!」

レジ全「うおー!ぐーんた、ぐーんた!」

団長「では、グンタより一言!」

騒がしい空間が一気に静かになる。案内猫、グンタをこづきながらささやく

団長「ほう、ここが我らが聖地、レジスタンスの集いだ。なんでもいい、あいさつをしろ。」

グンタ「え？いや、あのー。はっそうだ。」(困惑く決意の表情) ※会場再び少し騒がしく
グンタ「みなさん、ミキっていう女の人を見かけませんでした。緑色の車にのった。

ぼく、その人を探しているんです。」

会場、凍りつく

レジ1「お前・・・今・・・なんつった？」凄みながら近づく・

グンタ「ぼく、ミキっていう人に会いたいです。」

しばらくの沈黙、レジスタンス、お互いの顔を見合わせてためを作った後、

レジ全「だはははははは「思い思いに大爆笑

「にーんげん、に、にーん、にーんげん」と言いながら笑い続ける。

レジ1「ひーひー、お、お前さ、人間なんか探して、どするのよ？」席に戻る

レジ2「だって、お前あれだろ？」

レジ3「捨て猫ってやつだろ？」

レジ4「もう無理じゃん。探したって、意味ないじゃん。」

レジ5「また、捨てられて、ぽーいだ。」

レジ6「ちょっと、団長、どうしてこんなやつ連れてきたんすかー？」

レジ7「勘弁してくださいよー」

レジ8「こんなやつ無視して」

レジ910「飲み直そう！うえーい！」

再び、宴が始まる。(レジスタンス、会話を始める)

グンタ「みなさん、僕のはなしを聞いてください！どうしたら、ミキに会えますか？」

地面を踏みながら話すが、完全に相手にされない

色々なレジスタンスの前に行くが、相手にされない

グンタ「みなさん！」

グンタ「団長さん！」

団長「そう熱くなるな、グンタよ。ここにいるネコらはな、お前の考えている以上に人間にひどいこと、つらーいしうちをつけて今、ここにいるんだ。お前にはわかるまいことなのだよ。」

グンタ「人間がひどいことを？ぼくにはわからない。」

団長「そのうちわかるさ、ここはな、人間に憎しみをもったネコたちの集まりなのさ。」

グンタ「憎しみをもって、何をしようっていうのですか？」

団長「ふふふ、今は何もできないさ。今はな。」

♪：サイレン

色々なレジスタンスが、報告をしにくる

セキユ1「敵襲、敵襲、警戒レベル3！」(パソコンを操作しながら)

セキユ2「かわいたガールの到来です。」

セキユ1「フォーメーション5！」

セキユ2「2匹で適当にかわいがられ、去って行ってもらう作戦を執行します。」

セキユ1「レジスタンス3番、4番、直ちに配置についてください。」

セキユ2「敵、かわいたガールは三人の模様です」

レジ34が上手へスタンバイ、それ以外は段ボールに隠れる

グンタ「な、何があったのです？」

団長「人間がこの基地に入ってきたのさ。かわいたガールか、大したことはない、ちょうどよかった。グンタ、こっちへこい。見ていくといい。人間という生き物を。」

ガールが、ひな壇下手から登場

ガール1「みてーみてーねこちゃんがいる」

ガール2「ほんとだー。ちよっかわいいんだけどー。」

ガール3「きゃーなでなでしたーい」

ガール全員「かわいいー」

団長「グンタよ、お前にはどう見える。」

グンタ「うーん、ただ、かわいがっているようにしか見えませんが。」

団長「ああ、やはりな、お前は人間と長くいすぎたんだ。我々にはこう見え、聞こえるのだよ」

団長がパチンと指をならすと 一瞬暗転して 最初からやり直す

ガール1「うわーきたないのらねこー」同じ表情だが、トーンが違う

ガール2「ほんとだー、ちよっ気持ち悪いんだけどー」

ガール3「きゃーさわらなきゃだめなのー?」

ガール全員「かわいいーって言っている自分がー一番かわいいー!」(女声から男声へ)

団長「これが、人間の姿だ。あいつらは、すーべーて自分のために生きている、我々は利用されて

いるんだ。」

グンタ「まさか、僕のご主人は、ミキはこんなこと、思っていないせん。」

団長「まだそういうか。」

♪：サイレン

セキユ1 「敵襲！敵襲！警戒レベル7！」

セキユ2 「連れ去り子どもです。」

セキユ1 「我々を連れ去って、飼おうとするが」

セキユ2 「親に「うちでは飼えないからその辺に捨ててきなさい！」って言われ」

セキユ1 「平気で違うところへ捨てる、夕子の悪い連中です。」

セキユ1 「フォーメーション17」

セキユ2 「武力行使による、追出し作戦に切り替える」

レジ全 「うおー」

グンタ 「いったい、何が始まるんです？」

団長 「見ていくといい、我々の力を、お前はかくれておきな」上に手をかぎす

猫たち、段ボールのかげに隠れる（チータは便乗して上手へドロソ）

子ども12 下手から登場

子ども1 「絶対このへんにいたんだって。」

子ども2 「うそつけー猫が10匹以上なんているわけないじゃん」

子ども1 「見たんだって！」

子ども2 「ほらみる、1匹も・・・あ、ねこだ。」

ねこたち、段ボールの前まで出てくる「ニャーニャー」可愛い声を出しながら

子ども1 「ほら、いっただろ。うわあすごい数だね。」

子ども2 「よし、1匹可愛いを選んで、連れて帰ろうぜ」

子どもが1匹の猫に近づくと

♪…踊る大捜査線+ちよっとした決めポーズの後

猫たち全員武器を一斉に構え静止（喉元に銃口や刀）こだわりシーン

レジ3「出て……いきな。」

レジ全「出て……いきな。」

子ども12「ひ……ひ……ひ……」

下手へ逃げていく

レジ全「うおおおおー！」

ねこ、全体で喜ぶがレジ8は仲間のチータがないことに気づく。

レジ10「ちよ、ちよっと待ってー！」

静まりかえる

レジ10「ねえ、チータがない。」

レジ8「まさか、あいつら、どさくさに紛れて、チータを」

レジ2「ひどい、だから人間は大嫌いなんだ！」

レジ3「もう我慢できねえー！」

レジ4「取り返しにいこう、チータを。」

レジ5「復習してやるー！」

レジ全 雄叫びをあげながらしもてへ武器をかざしてドンドンと進む

団長「おい、お前はいいかないのか？」

グンタ「ぼくには、ぼくにはやらなければいけないことがある。

それに、ぼくは、どうしても人間が悪い生き物に思えないんだ。」

団長「ここまで人間の醜態をみてもおそれか。見損なつた、お前に期待したおれがバカだった。

今度会つた時は、敵だと思え！」

団長も下手へ怒りながらはけていく。

しばらく、テーブルにこしかけて呆然とするグンタ。上手からチータ登場千鳥足

チータ「ういーヒック、ヒック。酔っ払っちまった。飲み過ぎたな。」

グンタ「あなたは？」

チータ「俺かい？俺の名はチータ、お前と同じ捨て猫さ。」

グンタ、すかさず立ち上がる。

グンタ「チータ・・・みんな、あなたが人間に連れ去られたと思い、怒り狂って外へ飛び出しまし

たよ！」

チータ「ういーそれはそれは、ありがたいことで、ヒック。」

グンタ「追わなくていいんですか？」

チータ「おう？なんで？おれ、あいつら嫌いだし。」

グンタ「嫌いって、でもこのままじゃあの子どもたちも危ない。」

チータ「大丈夫だって、たかがねこ10匹位じゃなんもできないって。

俺はね、飲み食いができればどこもなんでもいいの。だから、ここにいるの。

でも、最近ここの連中危なくなってきたじゃない？だからそろそろ潮時かなって。」

グンタ「まさか、あなたわざと。」

チータ「まままま、そこはいいとして、だんな。俺はだんなが気に入ったぜ。

人間に捨てられても人間をなお思う。いやー健気だね。昔の俺にそっくり。

いったい何があったのか、話してくれねえか？」

しばし、身振りで会話をするふたり

チータ「なるほど、ね。ますます気に入ったぜ。しかし、そのミキってやつもいけすかないね。

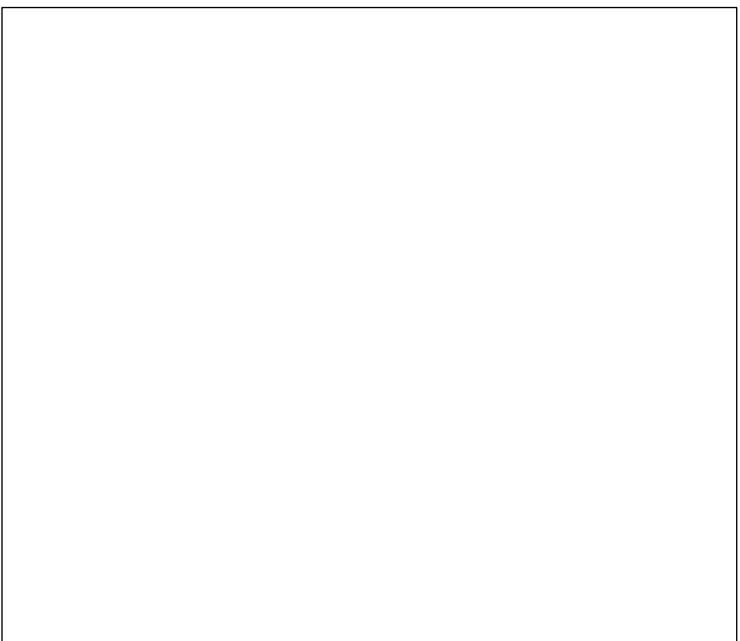
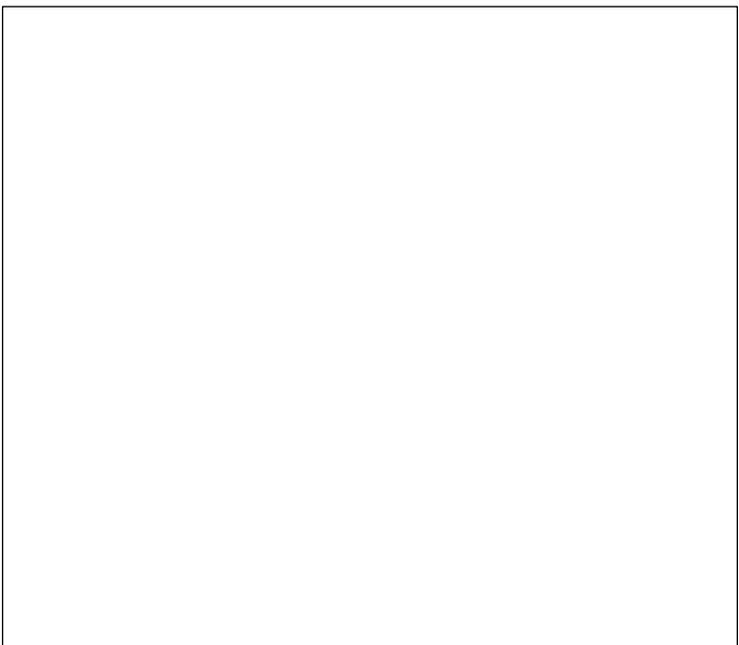
なんで、急に遠くへいってしまっただろうねえ。一緒に連れて行ってあげればいいのにな。
よし、このチータ様がお前と一緒にそのミキって女を探してやるうじゃねえか。その代わり、一緒に住めるようになったら、ご飯、たらふく食わせてくれな。今日は乾杯だ！」

暗転 この間に段ボールなどを片付ける

朗読 「グンタはチータと共にミキを探す旅を続けました。

♪：ブレイブストーリー

の音楽に合わせて実写版の回想シーンをつくる



一年、二年、三年の月日が過ぎましたが、ミキは見つかりません。

何度も何度も心が折れそうになりましたが、

そんな二人を支えてくれたのが

暖かい人たちとの出会いでした」

ライトアップ

舞台上で、カラスに追われる二人

カラス123 「カアカアカアカアカアカア」

ピタッと止まる

カラス123 「縄張り縄張り縄張り縄張り縄張り縄張り」

ピタッと止まる

カラス123 「出てけ出てけ出てけ出てけ出てけ出てけ」

追いかける

チータ「いってえ、なんだなんだよ、あいつら」

グンタ「あーあー体中また傷だらけだ。」

♪…お腹の音「ぎゅるぎゅる」

チータ「あーはらもへったー、もう、動けん、ちよっと、あそこの公園で休もうぜ。」

舞台開幕中でゲートボールをしているおじいさんおばあさん

ステージ上をボールが行き交う。それをムズムズしながらみる二人

チータ「な、なんだ、あのじいさんばあさん、棒で玉をたたいて遊んでいるぜ?」

おじ1「くらえ、わしのライジングショット!」球をうつ

おば1「そうはいきませぬ!わたしのホワイトフラッシュ!」球をうつ

おじ2「ぐう、ならばわしのアルティミットボンバー!」球をうつ

おば2「まあ、そうきましたか、ならばわたしのハニーフラッシュ!」球をうつ

※ネーミングはなんでもいいです。

チータ「なんだ、あのボールは、俺、なんだかムズムズしてきた。」

おじ1「ああ、ミスった〜」

グンタ「ほんとうだ、ぼくもだ、ああ、だめだー。」

ボールに飛びついて、猫パンチ。みごとにゲートに入る。

おじ1「おお、猫どの、ナイスショットじゃ！お前さんのおかげでたすかったぞい。」

おじ2「おや？このねこ、ケガしてるじゃないか。ばあさん、ばあさん、救急箱。」

ばあ1「はいよー、たしかここに。」

ばあ2「ええと、ねこの傷には」

おじ1「これじゃ。キンカンじゃ。」

おじ2「そうそう、これこれ。刺されたところにぬると」

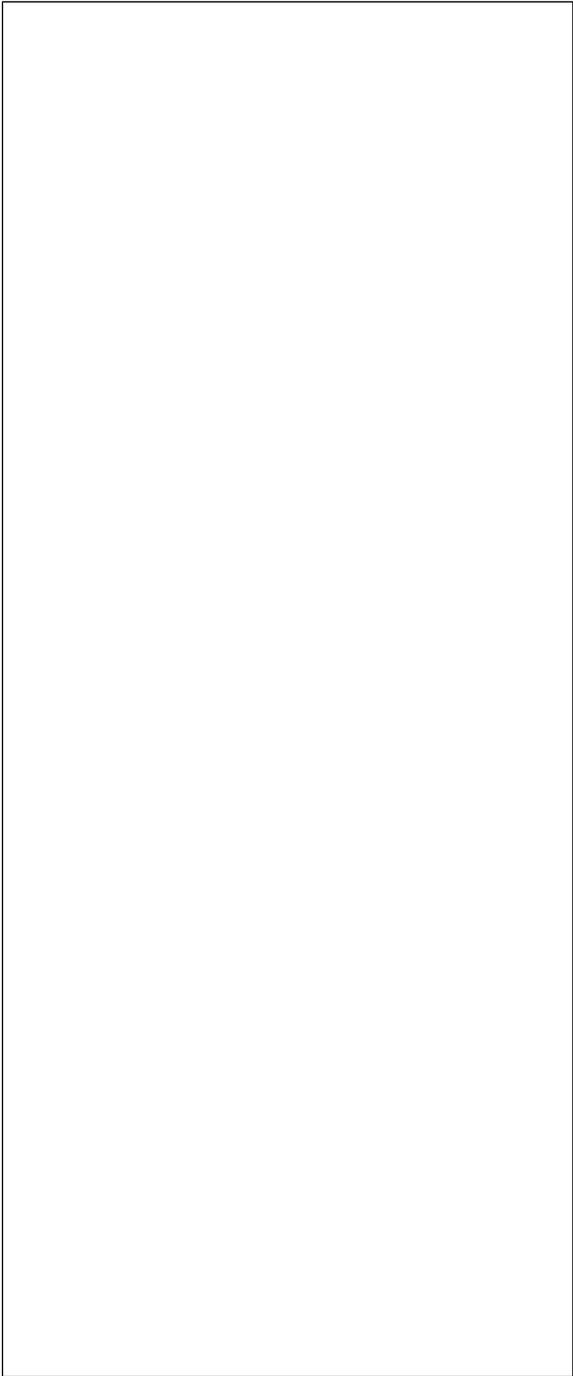
おじおば「スーすーするやつ・・・ちがうちがう。」

おじ2「本当にあなたはだめじゃ。。どくのじゃ。。きずにはいねじゃ、どめめじゃ。」

おば1「そうそう、これこれ。これをなめると」

おじおば「すーすーするやつ・・・ちがうちがう。」

おば1「ええと、どくのじゃ。。いねじゃよいね。」



おじ1「キズテープじゃ」

おじ2 「ほうたいじゃ」

おば1 「おろないんじゃ」

おば2 「消毒じゃ」。

おじ1 「ええい、らちがあかんわい。もう全部使っちゃえ！」

おじおば 「それじゃ」。

二人の腕に包帯をまく（キズテープや、塗り物はぬるふりのみ）

おじ1 「こんなもんかいの」。

おじ2 「こんなもんよ」。

おば1 「もうケガするんじゃないよ」。

おば2 「あら、おまさんたち、よくみたら、お腹がへっこんで、はらへっとなるんじゃないかい？

じいさん、じいさん、食べ物」。

おじ1 「えーとえーと、おおこれじゃ。はい、わしのプロテイン」

おば1 「そうそう、これを牛乳に入れて、とかしのむだけで、」

全員 「ムッキムキ！ちがうちがう」コントスタート

おじ1 「小魚じゃ」

おじ2 「ハムじゃ」

おば1 「たまごじゃ」

おば2 「かつおぶしじゃ」

おじ1 「らちがあかんから、全部お食べ」

全員 「それじゃ」。

おじ1 「こんなもんかいの」。

おじ2 「こんなもんよ。」

おば1 「それじゃあ元気だな。」

おば2 「また、遊びにおいでな。」

幕が閉まる

グンタ、チータ、少しポカーンとしてその場をさる。

チータ 「なんかよ、俺、こちらへんがポカポカする、なんなんだこの気持ち。」

グンタ 「いい人たち、だったね。今度、お礼をしにいこうよ。」

チータ 「そうだな。」

少し歩いていくと、♪…遠くから地響き↓近づいてくる

上手からレジスタンスの猫逃げようとすると、下手から、さらに逃げようとすると、花道

から団長、そして囲まれる

団長 「これはこれは、誰かと思えば、グンタじゃねえか。久しいな。そしてー後ろにいんのは

まさか、いなくなったはずのチータか。」

レジ6 「お前、人間に連れ去られたんじゃないかったのか。」

レジ7 「お前、俺たちがどれだけ探したのかわかってんのか。」

レジ8 「お前、俺たちをだましたんだな。」

レジ6 「まあ、いい。今日はいい日なんだ。」

レジ7 「二人ともそこをどいてくれねえか。」

レジ8 「俺たちは今忙しいんでな。」

グンタ 「忙しい?どづいうことだ?」

レジ1 「俺たちはこれから、あの公園のじいさんたちをやっつけて、公園から追い出すんだ。」

レジ2 「あの公園を新しい基地にするのさ。」

レジ3 「俺たちは増えすぎた」

レジ4 「みろよ、今ではそうぜい50匹だ。」

レジ5 「俺たちには広い住処が必要なんだよ。」

チータ「おい、グンタ、放っておこうぜ、数がやばい。」

グンタ「見てくれ、団長！みんな！この腕を、怪我している僕たちをあの老人の方々は治し、そしてはげましてくれたんだ。人間は悪い人ばかりだけではない、それ以上にいい人がたっくさんいるんだ。どうして、あなた方の目はそう偏っているんだ。」

団長「はあ、これだから、人間に飼われた猫はだめだ。だめだだめだだめだだめだ。お前のもぞみ

は叶ったのか？

あれから何年探している？

何年あきらめかけた？

お前のしょうがいは、人探しでおしまいか。

なぜ、自分のために生きない。

お前はね、わくすくれくらくれくたくの！

はい、どくどく」

グンタ「嫌だね。僕はあのおじいさんたちに助けられたんだ。絶対にどかない。」

チータ「ちくしょう、だんな、多分勝てねえが、お前さんのいう通りだ。あの世でもどこでも

しつこくへせ。」

団長「グンタ、俺たちは容赦はしない。命の保証もしない。それでもか」

グンタ「それでもだ。」

団長「そうか、残念だよ。お前の旅はここまでだ。」

取っ組み合いになり怒号が飛び交い、徐々に暗転

少ししてからちよつとずつライトアップ

グンタ「チータ、チータ！」

チータ「グンタ、ボロボロじゃねえか。あいつらは？」

グンタ「お前ほどじゃないよ。団長に噛みつき続け、なんとか帰ってもらった。

多分、だけど、おじいさんたちは大丈夫。」

チータ「それはよかったぜ。グンタ」間髪入れず

グンタ「チータ、もうしゃべるな。傷がとても深い。」

チータ「いやしゃべらせてくれ、俺はもう長く、ねえ。

はあはあ。グンタ

長い旅の中で俺は気づいたんだ。

お前のミキへの想いが本気なように、ミキも、お前のことを本気で想っている。

んでな、俺は、思ったんだ。

探すことよりも大切なこと、

それは、相手を信じて待つことなんじゃねか？

ミキは待つてるんじゃねえか？

大好きなお前を見つけた

最初の場所で。

グンタ、きた道は覚えているな

帰ってやれよ

ミキと出会った、あの場所に

グンタ、おれは、嬉しかったんだ。人間も猫も嫌いになっていたのに

気づくとおれはな・・・おれは・・・」

グンタ「チータ？チータ？いやだよ。ぼくをおいていかないですよ。チータ、チータ・・・

うわあああ〜」

しばらく涙をぬぐう。暗転↓チータはける↓ライトアップ

グンタ「チータ、ありがとう。ぼく、行くよ！」

ここからの朗読に合わせて絵

朗読「グンタは走りだしました。ボロボロの体を引きずって

足を前に出すたびに体中には激痛が走ります。

痛くて痛くて、涙が溢れ出てきます。

それでもグンタは走りました。

大好きなミキに会うために

ミキと初めて出会った、公園を目指して。

それから、7日後のことでした

小粒の雨がふる公園の中、初めてミキと出会った場所で

グンタは静かに息をひきとりました。

グンタは息を引き取る少し前に

小さな夢を見ました

「段ボールの中から空を見上げると、

かさをさしたミキがグンタをみていたのです

スポットライトのみが二人をてらす

グンタ「ミキ、ずっと探していたよ。」

ミキ「グンタ、グンタ。ずっと探したのよ。ずっとここで待っていたのよ。

こんなに傷ついて・・・こんなに冷たくなって・・・本当にごめんね。」

グンタ「ミキ、泣かないで、やっと会えたんだよ。もっと、喜んでよ。」

ミキ「わたし、結婚して、この公園の近くに住むことになったんだよ。

グンタ、これから一緒に住めるんだよ。

だから、いかないで、目をさまして。」

グンタ「ああ、ミキ全然変わっていないや、よかった。

あれ？なんだか眠いや。ぼく、寝るね。」

ミキ「グンタ、グンタ・・・」

F9のエンディング曲スタート+エンディングムービーも

朗読「気がつくと、グンタは、暗闇の中泡に包まれ、光あふれる場所へと向かい、泳いでいました。

グンタは自分が何かに生まれ変わるのだと確信しました。

光はどんどん強さを増していきます。

まぶしさになれ、グンタがうつすらと目をあけると

そこには涙を目に浮かべたミキの姿がありました。

グンタは堪えていたものを一気に吐き出すかのような

「元気な産声をあげたのです。」

エンディング

ミキ

ぼくね

迷いかけた時

諦めかけた時

心の中で

歌を歌ったんだ。

前に進むために

♪…エンディングソング1番

ここでは、エンドロールが流れ

キャスト紹介

エンディングソング2番

ここでは、学芸会練習風景や

クラスの様子が流れる

最後のサビは二人で生歌（状況によるが）を歌ってそこへ

全員出てきて

カーテンコール